佛蘭西紀行

別名、(エトランゼエ)

改版

島崎藤村著

東京
春陽堂發行

大正十一年九月十五日印刷
大正十一年九月十八日發行
大正十三年一月十五日二十五版

『佛蘭西紀行』
定價金壹圓七拾錢

著作者　島崎春樹
東京市日本橋區通四丁目五番地
發行者　和田利彦
東京市小石川區久堅町一〇八番地
印刷者　土谷清隆
東京市小石川區久堅町一〇八番地
印刷所　博文館印刷所
東京市日本橋區通四丁目五番地
發行所　春陽堂
（電話本局五一・四二一〇番　振替東京一六一七番）

■圖書目錄進呈
往復葉書にて御申込み次第

同じ著者によりて

詩集――藤村詩集

小說――破戒、春、家

短篇小說集――水彩畫家、創作選集（上卷）（下卷）、微風

小品、感想錄、及び印象記――藤村文集、千曲川のスケッチ

新片町だより、後の新片町より、巴里だより、佛蘭西だより

最近の著作

小說――新生（第一卷）、第二卷）、櫻の實の熟する時

旅行記――海へ、佛蘭西紀行

感想――飯倉だより

童話――幼さものに、ふるさと、をさなものがたり

佛蘭西紀行

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

同じ著者によりて

詩集――藤村詩集
小說――破戒、春、家
短篇小說集――水彩畫家、藤村集、食後、微風
小品、感想錄、及び印象記――藤村文集、千曲川のスケツチ
新片町だより、後の新片町だより、巴里だより、佛蘭西だより

最近の著作

小說――新生、櫻の實の熟する時
旅行記――エトランゼエ(佛蘭西旅行記)、海へ(航海記)
童話――幼きものに、ふるさと
感想錄――飯倉だより

序

エトランゼエは異邦人を意味する。毛髪の色を異にし皮膚の色を異にして遠く海を渡つて來る人達が自分等の國でのエトランゼエであるやうに、一歩この島國から海の外へ踏出して行つた同胞の旅行者で同じエトランゼエの心を經驗しないものはない。その意味から私は佛蘭西の旅行記を書くことを思ひ立つた。

試みに、私達が全く知らない土地へ行き、全く知らない人達の中に混つた時のことを想像して見て欲しい。そこには異なつた言葉があり、異なつた文化があり、異なつ

た歴史があり、更に多くの隠れた生活の背景のあることを想像して見て欲しい。否でも應でも私達は自分等の生活の方法をその土地に適應させるために、努めなければ成らない。これは旅を樂しくするといふためばかりでなく、自分等を保護する上からも必要なことであつて、その骨折なしには長期の旅も續けがたい。私達が遠く國をさして歸つて來るといふのは、その隔絶れた生活から歸つて來るのである。外國の方にあつたものと、もう一度自分等の國に見つけるものとの混淆から起つて來る不思議な心持は、所詮私達の上に働かずには居ない。歸朝當時の私達はまだ半ば旅にあるのである。自分の國が自分の國にはなりきらないのである。その頃の私達の心は遠く旅して來た土地の方の都會へも行き、田舍へも行き、異鄕の土の日あたりまでもあり〳〵と記憶で見ることが出來るやうな氣がする。けれども私達が紙をのべて、その印象の鮮かなうちに旅の見聞を書き得るかといふに、それには私達の心はあまりに動き過ぎて居

る。そして漸くそれが書けるかと思はれる頃には、遠い旅にあつた頃のことも兎角忘れ勝ちだ。外國の旅行記が書きにくいといふのも、その故だ。外國に居た時分のことを考へると夢のやうだ、と私に言つて見せたある美術家もある。

私が三年の旅を終へてアーヴルの港から佛蘭西を離れて來たのは、大正五年の四月末であつた。五月のはじめには私は倫敦から歸東の途に就いたが、その船旅だけにも五十五日を費した。

『長旅は實に私を疲らせた。思へば歸朝者の心理は世の多くの人々によつて想像さるゝほど樂しいものではない。遠く故國をさして歸つて來るほどのものは一人として旅を樂しかれと願はぬはなからう。歸國の後に於いて實際彼等が經驗するところのものは果して何であらうか。激しい神經衰弱に罹るものがある。强度に精神の沮喪するものがある。種々な病を煩ふものがある。突然の死に襲はれるものがある。驚かれるでは

ないか。それを見ても異常で複雑の作用が、制へがたい動搖が、ある隱されたる働きが、假令眼には見えず人には知られない迄も、多くの歸朝者の心を決して靜かにしては置かないことが分る、これはそも〳〵長い外國生活の結果か、まだ〳〵吾儕の異人種相競ふ海外の旅に慣れない證據なのか、張り詰た神經の急激な靜止と休息とに因るのか、吾儕日本人の本國の生活が外國のそれに比べて餘りにかけはなれて居るためなのか、それとも風土の激變の結果か、いづれとも私には言ふことが出來ない。日本に歸つて半年ほどの間、殆ど茫然自失の狀態にあつたとは、ある友人の私に話たことだ。私はこの友人の言葉の意味を自分の身に切に感ずる。』(自著『海へ』より)

こんな狀態にあつて、私はぽつ〳〵航海中の印象を書いて見たが、その後いろ〳〵さはることがあつてこの旅行記に筆執ることも果し得なかつた。大正九年になつて私は『エトランゼエ』の稿を起した。それから足掛三年後の今日、漸くこれをまとめる

ことが出來た。私達が旅の土産を取出すにも、それにはをほよそ適當な時機といふものがあらう。私のやうに歸朝後四年もの間を置いて取出したでは、しかも出し終るまでにこんな月日をかけたでは、これを旅の土産とも言へないかも知れない。

この書の中には巴里ポオル・ロワイアルの並木街のことがよく出て來る。私はあの古い產科病院前の下宿で、シュアレスの『三人』をあけて見て、その中のパスカルのことを書いたくだりにポオル・ロワイアル修道院に關する多くの記事を讀んだ。世にも稀な數學の天才で、しかも宗教的な『感想』を遺したパスカルのやうな人物が羅甸民族の間に生れて來たのは偶然とも思はれなかつた。さういふ私はポオル・ロワイアルの名をなつかしく思つたまでで、それが自分の下宿する町と奈何いふ關係にあつたのか、その邊の精しい消息も知りかねて居た。國へ歸つてから私はある書籍をあけて見た。その中にはポオル・ロワイアルの遺跡のことが傳へてあつた。あの修道院が巴里

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

の附近にあつたのは千六百六十年迄のことであり、巴里の市中にあつたのは千七百九十年頃迄のことだとしてあつた。矢張私はパスカルに緣故の深い町に旅の月日を暮して來たのだ。さう想つて見ると、朝に晩に私がよく歩き廻つたサン・ジャックの通りも、今は陸軍病院にあてゝあるヴアル・ド・グラスの古い禮拜堂の前あたりも、一層旅の思ひ出を深くさせる。

世界を旅するのは、自分等を見つけに行くやうなものだ。私はこの旅に上るそもそもの日から、それまで深く意識もせずに居た自分の髮を見つけ、自分の皮膚を見つけ、自分の眸を見つけた。そればかりでなく異鄕に送る月日の多ければ多いほど、私は旅の空でめぐりあつた多くの同胞から、それまで氣がつかずに居たいろ〳〵な性質のあることを學んだ。私は隨分さびしい思ひをして來たが——そのさびしさは、二度とこんな旅をする氣に成れないと思ひ〳〵したほどのものであつたが——しかし後になつ

て見るといろ〳〵な意味でこの旅を得としなければならない。

私はこの旅行記の中に、多くの書き泄らしたことのあるのを遺憾に思ふ。けれどもこの稿を起さうとした日から、私は旅で逢つた同胞の旅行者のことに成るべく自分の筆を限らうとした。あの遠い空を渡る鳥の群のやうに、互に手を引き合つて異郷を旅する海外旅行者の消息をいくらかでもこゝに傳へることが出來れば、それで私は滿足する。私は歐羅巴がまだ平和であつた頃に巴里に辿り着き、エルダン要塞戰のまさに始まりかける頃にあの都を去つた。私が旅で暮して見た三年の間に、あるひは病死し、あるひは戰死した佛蘭西の文學者の中には、ジユウル・ルメエトル、レミ・ド・グウルモン、シャアル・ペギイのやうな人達があつたこともこゝに書き添へよう。これを書きつけて居る間にも、いろ〳〵なことが胸に浮んで來る。舊い王宮の跡をエルサイユに訪ねた時のこと、巴里郊外にあるサン・クルウ、サン・ゼルマンに遊んだ時のこと、名

高いマリイ・アントワネットが絞首臺に上る前の一週を送つたといふ暗い部屋を『バレエ・ド・ジュステイス』の一隅に見て佛蘭西革命の當時を想像した時のこと――思出せば實に際限が無い。『寺院』を演じた時に見たサラ・ベルナアルの舞臺、ゴウガンの舊い友達であつたといふ人の家に見たあの後期印象派の畫家の遺作、其他佛蘭西にある藝術で好い意味にも惡い意味にもあの國をあらはして居るやうなものゝ多くも、こゝに書き泄した。旅で私が知合になつた佛蘭西人の家庭、そこで逢つた人達、そこで聞いた言葉、そこで經驗した心持なぞの忘れがたくて居るのもあるが、それも多くは省くことにした。唯、細い旅の一筋道だけがこの旅行記の中に殘つて居る。

大正十一年七月、麻布飯倉にて

島崎藤村

佛蘭西紀行

一

汽船エルネスト・シモンで佛國マルセエユの港に着いた人達が思ひ思ひに船を去らうとした時は、私も上陸する人の中に混つて居た。この船は横濱とマルセエユの間を往復する定期の航海船で、メサジユリイ・マリチイムといふ會社に附屬した佛蘭西船であつたから、矢張東洋方面からの殖民地歸りの佛蘭西人が船客の多數を占めて居た。二等船客だけでもざつと五六十人からあるそれらの佛蘭西人の客を除いては、和蘭人、亞米利加人、濠洲人、印度人、フイリツピン人、それから白人と黑人の血の混つた殖民地方の客などもあつた。唯一人、その中にコロンボの港から乘込んだ日本の客があつて、名乘り合つて見ると倫敦野澤組の松山君といふ絹商であつたが、この人もボオト・セエドで船を去つ

てからは、これから上陸しやうとする船客の中に、私は一人の同胞をも見なかつた。

その時はもう上陸の支度の出來た人達が、互に長い航海を終り顏に別れの言葉を告げて、順に舷の側の梯子を降りかけて居た。航海中船室を同じにしたよしみから、私の側へ來て別れの言葉を掛けて行く佛蘭西人の中には、二人の旅役者や、何を職業とするかも知れず仕舞のやうな人もあつた。この殖民地歸りの男や女の客、その他の旅行者と前後して、私もマルセエユの波止場に上つた。エルネスト・シモンの入港を知つて、上陸する人を待受ける男や女の佛蘭西人も多かつた。私がその海岸を立ち去る前に、神戸を出發した日から數へると三十七日も乘つて來た船の方を振返ると、二本煙筒のエルネスト・シモンは黑く塗つた大きな船體を波止場のところに横着けにして居た。毎日毎日私が海を眺め暮して來た船の甲板の側面は、その波止場の位置からは見あげる程高いところにあつた。

私は全く獨ぼつちでもなかつた。是非にとも言はないが、一緒に上陸したいなら隨いて來たまへといふほどの程度で、マルセエユの町まで案内して呉れやうといふ一人の佛蘭西人があつた。この人は國を出てから、もう長いこと支那の四川省の方に醫者を開業して居るが、七年目とかで鄕里のブルタ

アニユにある年老いた親達を見に歸るといふ。カステルといふ名で、私なぞよりずつと年の若い、まだ書生肌の田舍醫者だ。お世辭も何もない人で、佛領セエゴンの劇場を打上げて歸國の途にあるといふ男女の劇團の一行が毎日のやうに船の甲板を騷ぎ廻つたのを見ても、『奴等は皆、馬鹿です』と私に話し聞かせる程の人であつた。それほど冷靜な佛蘭西人であつたが、旅慣れない私のために稅關行の荷物の世話までして、面倒を見て呉れた。このカステル君が居なかつたら、かねて不安な思ひをして來た私は自分の上陸間際にすら幾倍の旅の困難を感じたか知れない。見ず知らずの旅人である私に、唯上海以來ずつと甲板を共にし食卓を共にした緣故で、この親切を見せて呉れる人のあるといふことは有難かつた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c